

## ホメロス『イリアス』第二十二歌

田中利光

このようにイリオス人は町中至るところに、子鹿のように逃げ込んでしまい汗を冷ましているのだった。そして水を飲んだ。そして渴をいやしているのだった、立派な防壁によりかかりながら。それに対し、アカイア人は城壁を目指して近付いていくのだった、盾を肩に斜めに構えて。

一方、ヘクトルはといえば滅びの運命が彼をその場に立ち留まらしめた、イリオスの、スカイア門の前に。

他方、輝けるアポロンはペーレウスの子アケレスに語りかけるのだった。

「ペーレウスの子よ、なぜ私を速い足にまかせて追いかけているのか、死すべき者のくせに、不死なる神を。今の今まで私が神であることをそなたは悟らなかつたのだ。そしてそなたというお人はむやみやたらに腹を立てている。

トロイア人と戦うことなど、そなたにはてんでそのつもりがない。彼らはそなたに怯え、町の中に閉じこもってしまったというのに、そなたときたらこんな所に引きこもってしまった。

しかし私を殺すことはできないよ、私は死なぬように定められているからね」

アポロンに対しひどく苛立って語りかけた、足速きアケレスは。

「私を欺いたな、遠矢を射る神よ、すべての神々のなかでもっとも害をなす方だ。今度はこんな所に城壁から逸らして引き入れて。もっと多くのイリオス人が間違ひなく地を噛んだことであろうに、イリオスにたどり着く前に。」

それなのにこの私から大いなる誉れを奪い、あなたはイリオス人を救ってやった、それも気安く、この先、往返しされる恐れがあなたには全くなかったというわけだ。

その力さえ私にあつたら、間違ひなくあなたに往返しをしたであろうに」

こう言うと町に向かって、勇み立ち、すぐさま歩を進めた。

素早かった、例の、戦車を引いて勝ち誇っている馬のよう、

即ち身体をいっぱい伸ばして平原を軽々とかけていく馬のようだった。

そのようにアキレウスは素早く足と膝を働かせているのだった。

そして彼のことを老いたるプリアモスが最初に目にした、

星のように輝きを帯びて平原を急ぎやってくるのを――

即ちその星は夏も終わり頃、姿を現し、その輝きは非常に際立って見える、

夜の闇の中で、多くの星々の間で。

そしてそれをオリオンの犬という名で人々は呼んでいる。

確かにそれはこの上もなく輝かしいが、悪い兆でもある。

そしてひどい熱病をもたらしもする、あわれな人間達に。

その星のように、走り来るアキレウスの胸元で青銅の鎧が輝いていた。

老人は叫び声を上げた。そして両手を高く上げて

頭を打った、そして大きくうめいて、大声で呼びかけるのだった、

愛しい息子に懇願しながら。しかしヘクトルは城門の前に

立っていた、アキレウスとあくまでも戦わんとして。

息子に老人は悲痛な声で語りかけるのだった、両手をさしのべながら。

「ヘクトルよ、お願いだ、待ち構えないでくれ、愛しい子よ、あの男を、

たった一人で、他に助け手もなしで。ペーレウスの子の手にかかって、たちまち

死んでしまうことのないように。あれの方がはるかに強いのだから、

なんとおまえは強情なのだ。彼奴が僕には「可愛い」ぞ、神々も「可愛がって」くれればいいのに。たちまち奴は倒れてそのところを犬とはげわしが食らうだろう。間違ひなく僕の胸から辛い思いも消えて行くことだろう。

奴は僕から多くの立派な息子を奪った、殺したり、遠くの島々に売り飛ばしたりして。

現に今も二人の息子、リュカオンとポリュドーロスだが

トロイア人は町にとじこもったというのに、その姿が見えぬ。

彼等を私に産んでくれたのは、女たちの指図役ラーオトエーだが、もし敵陣で生きていてくれるなら、その場合はかならず

青銅と黄金でもってあがないだしてやるぞ。屋敷にはたんとあるのだから、その名も高い、年老いたアルテースが娘に持たせたのが、

だがもう死んで、ハデスの館にいるのなら、

僕の胸には、そして奴等の母親には苦しみだ。我々が産んだのだ。

しかし他の者たちには苦しみはもっと短いものになるう、

もしおまえまでもアキレウスにやられて死ぬことさえなければ。

さあ、城壁の中に入れてくれ、わが子よ、トロイアの男たち、

女たちを救うために。そしてペーレウスの子に大きな誉れを

与えないために。そしてほかならぬおまえ自身大事な命を失わぬために。

それにほれ、みじめにもまだ生きながらえている僕のことと哀れんでくれ、

なんと不幸なことよ、父なる神クロノスの子は老いという敷居に立っている

者を辛い目に会わせて苦しめようというのだから、さんざんひどい目にあわせて。

息子たちは殺されていくは、娘たちはひっぱられるは、

部屋部屋は荒らされていくは、おさない子供たちは

恐ろしい戦闘のさなか地べたに叩きつけられていくは、  
嫁たちは手荒にアカイア人にひっぱられていくは。

しまいには犬どもがこの儂に食らいつき、戸口の前で  
手足を引きずりまわすことだろう、だれかが鋭い武器で  
突くなり撃つなりして命を奪ってしまえば。

その犬どもはもとはいえば儂が屋敷で番犬として食卓のそばで飼ってきたものだ。  
そいつらが心狂わせて儂の血をすすり

戸口の前でのうのうと横になるのだろう。若い者になら何事も様になる、  
戦いで殺され、鋭い武器で打ち倒されて横たわっているのも。

たとえ死んでも、見える様子はなんでも、すべて美しい。

しかし年寄りが殺され、犬どもがその白髪頭と  
白い髭のあとと陰部とを辱めているとなったら、

それこそ人間惨めなものよ、これ以上哀れなことはない」

老人はそう言った、それから白い髪を両手で引き抜くのだった、  
頭をかきむしっては。しかしヘクトルの気持を動かさないでいた。

続いて母親が別の所から嘆き悲しむのだった、涙を流しながら、  
胸元をはだけながら、片方の手で乳房を持ち上げた。

そして涙を流しながら彼に翼ある言葉を語りかけるのだった。

「ヘクトルよ、私の子よ、この乳房を大切に思っておくれ、そして私のこの身を  
あわれんでおくれ、かつて私がお前に乳房をあてがってあやしてあげただから。  
そういうことを思い出しておくれ、わが子よ、敵の男を防ぐのは

城壁の中にいてしておくれ。先頭に立ってあの男に立ち向かうのは止めておくれ、  
そういう大胆なまねは。だってあれがおまえを殺せばこの私はもうおまえのことを

ひつぎに入れて嘆くこともできないだろう、愛しい子よ、おまえを産んだのはこの私なのに。

持参金をたくさん持って嫁いできたおまへの妻とて同じだよ。私達から遠く離れた所で、

アルゴス人の船のかたわらで、犬どもがすばやくおまえを食いつくすだろう」

このように二人は泣きながら愛しい息子に語りかけた、

しきりに懇願しながら。しかしヘクトルの気持ちを動かさないでいた。

彼の方は待ち構えていた、巨体のアキレウスが次第に近付いてくるのを。

それは山に棲む蛇がその穴で人を待ち伏せているようだった、

劇しい毒草を食らい、恐るべき怒りに捕らえられた模様で、

見るもおそろしげににらんでいる、穴のところどぐるをまいて。

そのようにヘクトルは不屈の気力を持って退こうとはしなかった、

前に突き出ている塔に輝く盾を立て掛けて。

ところが困ってしまい、自分の勇ましい心に語りかけた。

「ああ、私としたことがなんとしよう。もし門と城壁の中に入れていけば

ポリュダマスがまっさきに私を非難してくるだろう。

彼は私にしきりに勧めていた、神にも紛うアキレウスが立ち上がったという

あの呪わしい夜のうちにトロイア人を率いて町に向かうようにと、

しかしこの私は従わなかった。あの場合に従った方がはるかによかったのだろう。

私の向こう見ずがもとで兵士らを死なせてしまった今となっては

私は恥ずかしい、トロイアの男たちに、また裳裾引くトロイアの女たちに。

誰か他の、私より憶病な奴がいつか言いはしないだろうか、と思うと。

ヘクトルは自分の力に頼んで兵士らを死なせた、と

このように言うやつらがいるだろう。それぐらいなら私にははるかにましだろう、

アキレウスと渡り合い、殺して帰還するか、

それとも奴にやられて、城の前で名譽ある死を遂げたら、そのほうが。

それともどうだろう、ホゾの突き出た盾と頑丈な兜を

下に置き、槍を城壁に立て掛けて、

私自ら出向いて、勝れた勇士アキレウスに会いに行ったらならば、

そして彼に約束したら、ヘレネーを、そして合わせて財宝を、

アレクサンドロスがくり船にのせてトロイアに運んできたものを

いくさの原因になったようなものはすっかりのこらず

アトレウスの息子ら兄弟に与えて持ち返らせる、と。

また合わせて他にこの町が持っているかぎりのものをアカイア人と分け合う

と言ったらどうだろう。その後でトロイア人から長老の誓いを取るのはどうだろう、

なにも隠すことなく、一切のもの、麗しい町の中に所蔵されている限りの

一切の物を二つに分けるといふ。

しかしなんだってまた私にこういうことを私の心があれこれ語りかけたのだろう。

いや、この私は彼のもとに言って頼んだりするまい、彼は私に憐みをかけたりしないだろう。

またまったく私を尊重もせず、無防備のままの私を殺すだろう、

女を殺すみたいに、武器を外してしまったら、

今となつては、事の次第をはじめから、

彼と話合っていることはできない、

若い男女が互いにいちゃいちゃと話し合うようなことを。

そんなことより一刻も早く早く渡り合う方がよい。

見てみよう、どちらにオリュンポスのゼウスが願いをかなえさせてくれるか」

このように思案していた、踏み留まって。彼アキレウスが近付いてきた、

兜の飾り毛を揺らせる戦き神エニユアリオス・アレスにも似て、

右肩に恐ろしい、ペリオン山のとねりこの槍を振り回しながら。

燃える火やさし昇る太陽の輝きに似て、

青銅の武具はあたりに輝いていた。

それを見るとヘクトルを震えが捉えた、そしてもはやそこに

踏み留まっていられなくなった。城門を後にした、恐れて逃げた。

ペーレウスの子は激しく襲いかかった、飛ぶような早足にまかせて。

その様子は山にあって、鳥の中で一番速い鷹が

やすやすと憶病な鳩のあとを追いかけるよう。

鳩は下へ下へと逃げていく。鷹は近付き、鋭い声を上げて、

なんども襲いかかる、捕らえんものと気負い立つ。

そのようにアキレウスは激しく真っ直飛びかかっていた。ヘクトルは

すばやく膝を動かせるのだった。そしてトロイア人の城壁に沿って逃げた。

二人は見張り櫓と風に揺れる野いちじくの木を傍らを過ぎ、

城壁の下から逸れて、車道をどこまでも走っていくのだった。

そして美しい流れの二つの泉に着いた。ここは逆巻くスカマンドロス河の水源地

二つの流れが湧き出ている。

一方の水の流れは暖かく、あたりには湯気が

立ち昇り、まるで火が燃えて煙が立っているようだ。

もう一方は、夏でもあられか冷たい雪か

水が凍って氷りのような水が流れている。

ここ泉の近くには石造りの立派な

広い洗濯場があり、そこで、きらびやかな衣服を

トロイア人の女房が、それに美しい娘たちが洗っていたものだ、

以前平和な時には、アカイアの子らがやって来る前には。

そこを二人は駆け抜けた、一人は逃げ、もう一方は後ろから追い駆けて。

前を逃げていたのが勇士であれば、追い駆けていた方が、はるかに立ち勝り、

そのすばやいこと。二人がねらっていたのは、男達が足を競う折りの賞品、

犠牲の獣でも牛皮の盾でもなく、

馬の馴らし手ヘクトルの命がかかっていたわけである。

そしてそれはまた蹄の割れていない馬が折り返し地点をたいそうすばやく

回って賞を得る時のように、そして、三脚釜とか女とか、

大きい賞品が、人が亡くなった催しで、かかっているというような、その時の馬のように、

そのように二人は三度プリアモスの町のまわりをまわった、

すばやい足で。神々は皆見入っているのだった。

そしてその神々に語り始めるのだった、人間達と神々の父は。

「なんとしたことか、城壁のまわりを可愛がっている男が追い駆け回されているのを

この目で見ていることになろうとは。私の心はヘクトルのことで

痛む。彼は私にたくさん牛の腿を焼いてくれた、

山巒多いイーデーの頂きで、またある時は

城の高みで。ところが今は彼のことを神にも紛うアキレウスが

プリアモスの町のまわりを速い足で追っている。

さあ、神々よ、考えてくれ、そしてよい案をだしてくれ、

彼を死から救ってやるか、それともはや

ペーレウスの子アキレウスに討たせるか、立派な男ではあるが」

彼に答えて、輝く瞳の女神アテーネーが言った。  
「強烈な稲妻をお持ちの、黒雲をお持ちのお父さま、なんとことを言われるのですか。



死すべく、とうに運のきまっている男を

また、いとわしい死から救い出してやりたいというのですか。そうなさいませ。しかし私ども他の神々は皆賛成いたしません」

アテーネーに答えて、雲を集めるゼウスは言った。

「心配するな、トリトゲネイアよ、愛する娘よ、そのつもりで言っているのでは全くない。お前の気持ちにそいたいと思っている。お前の意向通りするがよい。もはや遠慮することはないよ」

こう言って促すのだった、もうその気になっているアテーネーを。

女神はオリュンポスの峰を矢のように下って降りた。

さてヘクトルを休みなく激しく狩りたて追ひ駆けていた、すばやきアキレウスは。まるで山中で鹿のこを犬が追ひ駆ける時のよう、

かくれがから狩り立て、谷間を抜け、山合いを抜け、

茂みの下にうづくまって身を隠しても

しかし後をつけ、見つけ出そうとしてどンドン走っていく、そのように

ヘクトルは足速きペーレウスの子の目を逃れることはないのだった。

ダルダノス門に向かって、よく作られた塔の下に

もしや上から矢で助けてくれはしまいかと思って

さっと身を寄せようとしきりに試みるが、その度に

アキレウスは前に先回りして平野の方へ

押し戻した、自分の方はいつも町の側を駆けているのだった。

しかし夢の中のように逃げていく者に追いつくことができない、

また逃げる方も逃げおおせることができない、追う方も追いつくことが

そのようにアキレウスはその足をもってしてもつかまえることができず、ヘクトルは

逃げおさせることができずにいた。

どうしてヘクトルは死の運命を逃れ得たことであろう、

もしアポロンが——これがぎりぎり最後のことだったが——近付いてくれなければ。

アポロンはヘクトルに勇気をかきたて、すばやい膝を与えた。

そして神にも紛うアキレウスは、兵士等に対して、頭を後ろに振るのだった。

そしてヘクトルに鋭い矢を射ることを許さないのであった。

誰かが射て、誉れを上げ、自分が後れをとらないように。

しかしちょうど四度目に泉のところ二人が来た時、

まさしくその時に父なる神は黄金の秤をひろげるのだった、

そしてそこに長い悲しみのもとなる死の運命を載せるのだった、

ひとつはアキレウスのを、ひとつは馬の馴らし手ヘクトルのを。

そして真ん中を取って持ち上げるのだった。ヘクトルの運命の日が下がっていくのだった。

ハデスの館に向かっていくのだった。そして輝けるアポロンは彼を残して立ち去るのだった。

ペーレウスの子のもとに輝く瞳の女神アテーネーがやってくるのだった。

近くに立って翼ある言葉を語りかけるのだった。

「今こそわれら二人は、ゼウスに愛されたる、輝かしきアキレウスよ、

大いなる誉れをアカイア人の船に持ち返れることと思いません、

ヘクトルを——戦いに飽くこと知らぬ男ではあるが——打ちとって。

今はもはやわれわれの手を逃れることは彼はできません。

たとえ遠矢を射るアポロンがどんなにいろいろ骨を折ったところで

神盾持てる父なるゼウスの足元でいくら転げまわっても。

さあ、そなたの方は今は動くのはやめて休みなさい。彼の方はこの私が

出掛けていって、一騎打ちで戦う気に、きつとさせよう」

このようにアテーネーは言った。アキレウスは喜んで従うのだった。そしてそれから立ち止まって、先が青銅の、とねりこの槍にもたれた。

女神はそれからアキレウスの方はその場に残り、神にも紛うヘクトルに近付いた、姿と囁れることなき声をデーイポボスに似せて。

そして近くに立って翼ある言葉を語りかけるのだった。

「兄上、ずいぶんと攻め立ててきますね、すばしいアキレウスは、プリアモスの町の回りを速い足で追い回して。」

しかしさあ、立ち止まり、待ち構え立ち向かって防ぎましょう」

つづいて女神にむかって言った、丈高く、兜をきらめかせたヘクトルは。

「デーイポボスよ、まことにそなたはこれまでもこの上もなく最愛の

兄弟だった、ヘカペーとプリアモスが産んだ子供達のなかで。

今はますます大切に思う気持ちがある、

様子を見るなり私のために城壁から敢えて

出てきてくれたのだから、他の者の中には居るままなのに」

つづいて彼にいった、輝く瞳の女神アテーネーは。

「兄上、確かに父と母上は次々と私の膝にすがって

この場においてくれとしきりに懇願しておられました、それに周りでは仲間達が。

そのように実際みな恐れおののいているのです。

しかしこの私の心中は悲しみに痛みつけられて、擦り切れておりました。

今こそまっすぐ相手を目指して闘っていきましょう、槍など少しも

惜しまないことにしましょう、見てみましょう、果たしてアキレウスが

我等二人を殺して血塗れの武器を中がうつるな船に運んでいくことになるのか、

それともあなたの槍で打ちすえられることになるのか」

このように言ってアテーネーは巧みに先に立った。

さて両者が互いに詰めより、ちょうど間近に来た時、

先に彼に語りかけた、丈高く、兜を輝かせたヘクトルが。

「ペーレウスの子よ、もはやそなたから逃げたりはしないぞ。これまでは

三度プリアモスの大いなる都の回りを逃げ回っていたが、また立ち向かってくる

そなたを待ち受ける勇気が出なかったが。しかし今はそなたに真っ向から

立ち向かう勇気が私に湧いた。討ち取るか、討ち取られるか。

さあ、ここに神々を証人として呼ぼうではないか。神々こそ最善の

証人、また取り決めをもっともよく見張っていてくださるであろう。

即ちこの私はそなたの身にひどい仕打ちを加えない、もしわたしをゼウスが

持ちこたえさせ、そなたの命を奪った場合にも。

名高い武器を奪い取ったら、アキレウスよ、

遺体はアカイア人に返そう、同じようにそなたもしてくれ」

すると彼を上目使いににらんで言った、足速きアキレウスは。

「憎いヘクトルよ、私に向かって取り決めなどと口にするな。

ライオンと人間の間に堅い誓いなどあるはずがない。

また狼と子羊が同じ気持ちを持ちたりはしない。

いつもお互いに悪意をいだいているのだ。

同じようにわたしとそなたとが親しくなることはありえない、我等

二人の間で誓いなどありえない、どちらかが倒れて、

頑丈な盾持つ軍神アレースを血で飽かすまでだ。

身に覚えたあらゆる武術を思い起こすがよい。今こそはまさしくそなたは

槍の使い手、大胆な戦士たらねばならない。

もはやそなたは逃げることはできぬ。すぐにパラス・アテーネーがそなたを私の槍で打ち倒すであろう。今やなにもかもまとめて償うことになるだろう、そなたが荒れ狂って槍で殺したわたしの仲間達の悲しみを」

と言ったのである。そして前後に振って長い影をひく槍を投げたのだった。そしてそれを見据えてかわした、誉れに輝くヘクトルは。

すなわち目にするや身をかがめたのである。そしてその青銅の槍は上を飛んで地面に突き刺さった。それをパラス・アテーネーが急いで掴み上げた。

そしてアキレウスに戻してやるのだった。兵士らを指揮するヘクトルは氣付かなかった。ヘクトルは堂々としたペーレウスの子に向かって言った。

「そなた当て損なったぞ、神々にも似たアキレウスよ、ゼウスから私の寿命を

まだ全然知らされていなかったというわけだ、すっかり知っているつもりではあっても。

そしてそなたはへらへらと口の達者なお人だったわけだ、

そなたを恐れて力と勇気を私に忘れさせようとしただけだったのだ。

逃げていく私の背中に槍を突きたてることはできないだろう。

まっすぐ迫っていく私の胸を貫いてみよ。

神がそなたにそれを許すならばだが。今度は逆に私の青銅の槍をかわしてみよ。

そなたの身にぐさっと突き刺さってもらいたいもの。

そうなればトロイア人にとって戦争は楽なものになるう、

そなたが死ねば。そなたこそトロイア人にとって最大の災いだから」

と言ったのだった。そして前後に振って、長い影を引く槍を投げたのだった。

そしてペーレウスの子の盾の真ん中に当てた。ねらいあやまつことはなかったのだが槍は遠く盾からはねかえった。ヘクトルは腹を立てた。

すばやい槍が空しく手から飛び去ったのに

啞然として立ちつくした。そしてかわりのとねりこの槍は手もとにないのだった。

白い盾を持つデーイポボスと呼ぶのだった、大声をあげて。

長い槍を彼から求めるのだった。しかし近くには全くいない。

ヘクトルは心中覚った、そして声を出した。

「ああ、なんとということか。神々が私を死へ招いたことは間違いない。

勇士デーイポボスが傍らにいてくれるとばかり思っていた。

しかし彼は城壁の中にいる。アテーネーが私をだましたのだ。

今や忌まわしい死が間近だ。遠くない、逃れようもない。

実はこうなるほうをお好みだったのだ、

ゼウスもゼウスの御子、遠矢を射るアポロンも、お二人はかつては私を

進んで守ってくださったっていたのだが。しかし今や私の運命が近付いている。

なすところない不名誉な死ではなく、

後の世の人にも聞こえるなにか大きいことをして死にたいものだ」

こう言ってそれから鋭い剣を抜いた。

それは彼の腰につるしてあった、大きく頑丈なもの。

そして身を屈めて襲いかかった、

ちよとど、高い所を飛んでいて、急に黒雲を貫いて平原に向かい

か弱い小羊か億病な兔に掴みかかるとする驚のよう。

そのようにヘクトルは鋭い剣を振りながら襲いかかった。

そして立ち向かった、アキレウスは。そして心を荒々しい闘志で満たした。

美しい技巧を凝らした盾が胸の前を被った。

四つ角の、輝く兜を揺らすのだった。

美しい黄金の房毛がなびいていた、

これはヘーパイストスが、兜の上にびっしりと付けておいたもの。  
そして夜の闇に空に輝く一番美しい星、

夕星が星々の間を進み行くように、

そのようにとがった槍の穂先が輝いていた。アキレウスはそれを  
右手で振りかざしていた、神にも紛うヘクトルに危害を加えんものと。  
どこが一番やりやすいか、美しいはだえを見つめていた。

他の所については素晴らしい青銅の武具が肌を被っていた。

それは猛きパトロクロスを殺して剥ぎ取ったもの。

鎖骨が肩から首を分かっている喉のところで皮膚が現れていた。

そこはもっとも素早く命を奪える場所だ。

そこを狙って、自分にむかって勢い込んでくるところを槍でさした、神にも紛うアキレウスは。

穂先はやわらかな首筋に突き通った。

しかし青銅の重い槍は喉を切り裂かなかった、

応答してものが言えるためとでもいうように。

ヘクトルは砂塵を立てて倒れた。神にも紛うアキレウスは勝ち誇っていた。

「ヘクトルよ、そなたはパトロクロスの鎧を剥ぐ時には、

安全だと思っていたのであるう。身を引いていた私のことは念頭になかったわけだ。

愚か者めが。彼の傍らにいらなくても、そなたよりはるかに強い助太刀が

うつろな船のところにまだ控えていたのだ。そなたの膝を

突き崩した私だ。そなたは犬と野鳥が

無残にも食いちぎることだろう、彼はアカイア人が葬るだろう」

彼は力なく答えた、輝く兜のヘクトルは。

「頼む、そなたの命と膝とご両親にかけて。

アカイア人の船のかたわらで、私を犬が食いちぎるままにするのはやめてくれ。そしてそなたはたくさんの青銅と黄金を受け取ってくれ。

父と母上がそなたに払うであろう。

私の身体は家に返して欲しい、私の遺骸を

トロイア人とその妻等がしかるべく火葬に付すことができるよう」

すると彼を上目使いに見て言った、足速きアキレウスは。

「この犬めが。私の膝や両親にかけて願うのは止めよ。

ああ、なんとしても無性に腹が立つ、

生のまま肉切りきざんでかぶりついてやりたい、そうされるだけのことをそなたは行ったのだ。

そしてそなたの首を犬どもから守ってくれるような者も誰もいないだろう。

また十倍、いや二十倍もの身の代を

ここに持って来て、またそのほかのものを呉れると約束しても。

またダルダノスの裔プリアモスがそなたの身体を、それだけの重さの黄金と引換に

引き取りたいと言っても駄目だ、またそなたを母上が、

みずから産んだそなたをひつぎに横たえて嘆くこともできないだろう。

犬どもと野鳥がそなたの身体をすっかり食いつくすことだろう」

死んでいきながら彼に言った、輝く兜をつけたヘクトルは。

「確かにそなたのことをよく知ってみれば、私の末はそうなることであろう。

きいてもらおうとしたのが無理だった。そなたの心はまるで鉄のようだ。

さあしかし心得ておくがよい、神々の怒りを私のことで買うことにならなかつたかと

パリスと輝けるアポロンが、強いとはいえそなたを

スカイア門のところで討ち取るであろうその日に」

このように言った彼を死の終わりが包んだ。



魂は肢体から飛び去り、よみの王の館へ向かうのだった、おのれの運命を嘆きつつ、雄々しさと若さを後に残して。

死んでも彼に向かつて語りかけるのだった、神にも紛うアキレウスは。

「死んでおれ。死の運命を私は甘受する、ゼウスそれに他の不死の神々が与えようとされる時にはいつでも」

こう言った。そして遺骸から青銅の槍を引き抜いた。

そしてそれを離して置いた。そして肩から血塗れの武具を

剥ぎ取るのだった。ほかのアカイア人の子らが周りに駆け寄った、

彼等はヘクトルの立派な身の丈と容姿に

賛嘆もしたが、しかしそれから近付いて遺骸を傷つけぬ者とはいなかった。

互いに傍らの者を見てこう言い交わすのだった。

「なんだ、これは。ヘクトルもえらく扱いやすいものよ、

燃え盛る火で船を焼き払って来た時に較べたら」

こう言っつては遺骸のそばに立って傷付けるのだった。

足速き、神にも紛うアキレウスはヘクトルの武具を剥ぎ取ると

アカイア人の中に立って翼ある言葉を語るのだった。

「親しき友よ、アルゴス人を先に立って指揮する方々よ、

この男を神々は討ち取ることを許してくださいました。

この男は他の者が皆でかかってもできぬほど多くの悪事を働いた者だが、

さあ武具をつけて、町の周りで試してみようではないか、

トロイア人が更にどんな考えでいるか、その考えを知るために。

この男が死んだからには、城を捨てるつもりでいるか、

あるいはヘクトルがもういなくなってもあくまで留まるつもりか。

しかしどうして私の心はこういうことを私に語りかけたのだろう。

船の傍らには泣いてもらえもせず、葬ってもらえずにパトロクロスは屍のまま横たわっている。彼のことは忘れない、この私は、

生きた人間たちの間にいる限り、この膝が動く限りは、また

よみの王の館に行くと、人は同じ死者のことをすっかり忘れずとも

しかしこの私はかしくでも親しい友を忘れたりはいしない。

さあアカイアの子らよ、勝利の歌を歌いつつ

くりぬいた船に帰っていこう。この男を引っ張っていこう。

我々は大いなる誉れを勝ち取った。町中のトロイア人が神のように

寄り頼んでいた、神にも紛うヘクトルを討ち果たしたのだ」

と言ったのである。そして神にも紛うヘクトルに対し無残な仕打ちを考え出したのだった。

両足の後ろの腱に穴をあけた、

かかとから足首まで。そして牛皮の紐で括ったのだった。

そして戦車に縛りつけた。そして頭はひきずられていくままにした。

そして戦車にのり、そして名高い武具を積み込み

それから鞭を加えて馬を走らせた。そして二頭の馬はいやがることなく飛ぶように走っていくのだった。

ヘクトルが引きずられていくと砂塵が立った。そして両側に黒々とした髪が

広がるのだった。そして頭はすっかり砂の中に

まみれるのだった、かつては麗しかった頭も。この時ばかりはゼウスは

敵どもをしてヘクトルに対してその父祖の地で無残な仕打ちを加えるがままにした。

このようにヘクトルの頭はすっかり砂にまみれていた。するとその母親は

髪をかきむしるのだった。そして目もあやなヴェールを遠くにながり捨てた。

そして息子の有り様を見つめ、大声をあげて嘆いた。

彼の父親は哀れな叫び声をあげた。そしてそのまわりで町中の人々が嘆き悲しみに閉じ込められていた。

そこでそれはちょうど険しい岩のきわに立つイリオンの町全体が火と煙に包まれているとでもいうような様子だった。

人々は老人がダルダノスの門から苛立って

しきりに出ていこうとするのをやっと押さえていた。

そして老人は汚物の中を転がりながら皆の者に懇願するのだった、

一人一人名前を呼んでは。

「皆の者、やめてくれ、儂を一人で町から出て

アカイア人の船へ行かせてくれ、心配ではあろうが。

頼んでみることにしよう、あの男に、無法な乱暴者だが。

もしや年に敬意を表し、老いた儂を哀れんでくれるかもしれない。

そして彼にも現に同じ年頃の父ペーレウスがいる。

アキレウスを生み、トロイア人の禍になるべく育ててきたお人だ。

だれにもましてアキレウスはこの私に苦痛を与えた。

だってあれほど多くの若い息子達を彼は殺した。

それも辛いことだが、そのもの達全部のこともそれほど悲しまない、ただ一人

ヘクトルのことほどには、その突き刺さる悲しみが冥の王の館へ私を運び去るだろう。

ああ、私の腕の中で死んでくれたら。

そうすれば心ゆくばかり泣き悲しむことができただろうに、

彼を産んだ、哀れこのうえない母親と私と二人して」

泣きながらこのように言った。町の人達もそれに応えて嘆き悲しむのだった。

そしてトロイアの女達の間で、ヘカベーが先になつて激しくうめくのだった。

四〇

四五

四〇

四五

四〇

「わが子よ、私はなんとみじめなのだろう。これでどうやって生きていけばよいの、そなたの死という恐ろしい目にあつて。そなたは夜となく昼となく

町中、自慢の種でした。そして町中の、トロイアの男、女、みんなの者にとつて助けでした。彼等はそなたを神のように

喜んで迎えておりました。本当に彼等にとつてもそなたは大きな大きな誇りだったので、生きていた時は。それが今は死の運命が訪れるとは」

泣きながらこのように言った。ヘクトルの妻は彼のことをなにも

きいていなかった。というのにはちゃんとした使いが来て、彼女に

伝えることはなかったからである、夫が門の外に留まっているとは。

彼女はそびえ立つ屋敷の奥間で機を織っていた。

明るい綾布で、そこにいろいろな模様を織り込んでいるのだった。

そして言いつけた、屋敷中の髪うつくしい侍女たちに、

火に大きい三脚釜をかけるよう。それは戦いから

帰ったヘクトルのために熱い湯を用意するためであった、

愚かにも、お湯どころの話ではなく、輝く瞳のアテーネーが

アキレウスの手によって夫を討ち倒したことなど思いもかけなかった。

そして城壁の方から男と女の泣き叫ぶ声を耳にした。

彼女は膝を震わせた。手にしていた梭が下に落ちた。

そして髪うつくしい侍女たちに声をかけるのだった。

「さあ、二人私のあとについて来ておくれ、何事が起こったのか見てきましょう

やさしいお母様のお声も聞こえていました。この私の

胸のうちでは、心臓が口もとまで飛び上がらんばかり、足元では膝が

こわばってしまいました。なにか悪いことがプリアモスの子等に迫っているのです。

ああ、こういう事が私の耳に入らなければよいのだが。でもとてもひどく恐ろしい、大胆なヘクトルを神にも紛うアキレウスが

町から一人切り離して平地に追い立て、

あの人の、災いのもとになる勇氣に止めをさすのではないか、と。

あの人をその勇氣がいつも彼を捉えていました。味方の群れの中に決して留まっていることはせず、遙か前へと走り出て行く方でした、ご自分のその力では誰にもひけをとるまいとしていました」

このように言って屋敷を駆け抜けた、気が狂ったように。

心臓をどきどきさせながら。いっしょに侍女たちがついていくのだった。

ついで、城壁と男たちの群れのところにつくと

城壁の上に立って見回した、夫が町の前を

ひかれていくのを認めた。足早き馬が夫を

容赦することなくアカイア人のうつろな舟にむかってひいていた。

目に黒い闇が降りて彼女を包んだ。

そしてうしろに倒れた、そして気を失った、

そして、髪を束ねる、素晴らしい品々を遠くに投げやって。

冠、頭飾り、編んだ髪留めと

ヴェール。これは黄金のアプロディーテーが彼女に与えたもの、

輝く兜のヘクトルが、数知れぬ結納の品を納めて

彼女をエーティオンの館からめとった日に。

夫の姉妹たち、兄弟の妻たちが彼女のまわりに集まって立った。

彼女らは死ぬほどにもくずおれている彼女を皆で支えているのだった。

それから彼女は気を取り戻した、そして気持ちをはっきりすると

声を上げ、嘆きつつ、トロイアの女らの間で言った。

翌

翌

翌

翌

翌